

日英の雑誌に見られる女性教師表象のカリカチュアの比較研究

小橋 玲治（文学研究科 比較文学）

1. 調査趣旨

本調査の目的は、19 世紀の近代化の中で登場した「女性教師」という存在がどのように描かれ、何が戯画化ないし問題視されたのか、雑誌・新聞を題材として、その最初期の例であるイギリスと、後に同様の軌跡を辿ることになった日本とを比較検討することにある。

働く女性の存在は両社会で容易に受け入れられたわけではなく、そこにはまさに「コンフリクト」というべき摩擦があった。それらの問題を最も端的に表現していたのが、識字率と出版技術の向上によって拡大した雑誌・新聞においてであり、それを絵解きし、あるいは誇張した挿絵であった。今回の調査では、女性教師が女性の社会進出の先鞭としてとらえられた事例を、イギリスにおけるカリカチュアを通じて発掘し、それらの図像がジャンルや媒体を超えて伝播していく過程を明らかにしたい。

イギリスに遅れて、あるいはその事例を批判的に学びながら、日本においても女性の社会進出は当然迎えられるべき近代化の一環としてとらえられ、同時にそれに対する反発もまた起こった。今回の調査によって、イギリスのカリカチュアと日本の大衆雑誌における挿絵とを比較し、働く女性を取り巻く言説において、何が批判され、諷刺されたのか、図像だけでなく問題設定の流用や共通点を具体的な資料に基づいて検証したい。

2. 調査概要

(1) 訪問地…イギリス・ロンドン・大英図書館（2月28日～3月14日）

※当初、近代英国における反フェミニズムに詳しいケンブリッジ大学の Lucy Delap 教授との面会を予定していたが、調査期間中に先方のご都合がつかず、調査および研究の成果については、継続して連絡をとることとなった。

(2) 調査方法…高額なため、実質、大英図書館からのみアクセスできるデータベース、19th Century UK Periodicals と British Periodicals Collection I & II を基に、適宜、同図書館所蔵の現物を確認しながら、女性教師表象が見られる挿絵を探し出した。その際、戯画化されたもののみを恣意的に選別するのではなく、比較的中立の立場から描かれたものも検討した。また、Kent 大学が提供している British Cartoon Archives も随時参照した。日本側の資料としては、英国での調査の前後に大阪府立図書館所蔵の図書を参照した。

3. 調査結果

(1) Dame school の存在

19 世紀のイギリスでは Dame school という、いわば私塾のような学校が初等教育の場として機能していた。その名の示す通り、田舎の婦人（＝Dame）が自宅で開いていた学校であった。Dame school は時に雑誌にも描かれることがあり、Thomas Webster が 1847 年に描いた Dame's school を挿絵として使用するものもあったが、

中には明らかに戯画を意図して描かれたものもあった。その際、先生と生徒は1対1の関係で描かれていたが、その構図は「女性教師を馬鹿にする男子生徒」という、典型的な女性教師のカリカチュアへと発展していったと考えられる。

(2) 挿絵作家たちの存在

多くの研究が指摘するように、雑誌の発達とそこに掲載された小説の流行は、ディケンズのような人気作家を生み出したが、その作品は挿絵と不可分のものであった。ディケンズの作品によく絵を提供していた Phiz(1815~1882、本名 Habet Knight Browne)や John Leech(1817~1864)は、後に *Punch* の挿絵を担当しており、特記すべき重要な挿絵作家といえる。Phiz はディケンズの長編三作目の *Nicholas Nickleby* で田舎の寄宿学校を描いているが、そこに描かれた校長夫人は明らかにネガティブな意図を以て描かれており、それが *Punch* に提供した女性教師のカリカチュアにも継承されていることを確認した。

(3) 媒体の違いによる表象の差異

(1) で挙げたように Dame school の光景が挿絵に描かれたとしても、無論一様に風刺的であった訳ではない。その媒体の性格によってことさらに問題視しないものもあれば、明らかに悪意を以て描かれているものもある。子供向けの雑誌には Dame school の絵が掲載されていてもそれは教室の一風景であったりするが、時に同じ雑誌に悪意とまでは言えなくとも厳しい女性教師の挿絵が描かれることがあった。それは子供が読者対象だけに強烈な印象を与えたであろう。

(4) 図像の転載と伝播

1891年創刊の *Strand Magazine* は *Punch* と読者層を多く共有しつつも読み物を中心にすることで距離をおいていたが、1899年の一年間だけの企画ながら、*A Peep into "Punch"* として、*Punch* に掲載の挿絵が転載されたことがある。その中に女性教師のカリカチュアもあることが判明した。今回、英国国内での図像の転載については十分調査する余裕がなかったが、*Strand Magazine* の記事や小説との関連を含め、興味深い事例といえる。

(5) 日本への伝播

(4) は転載という形で了解を得て図像が伝播する例であるが、日本へは主に転用や流用という形で女性教師のカリカチュアが伝播している。今回の調査では、国内の女性教師のカリカチュアの源流や材源を確認することができた。こうした図像の転載と伝播については、ほかにも多くの興味深い事例があることが今回の調査で予想できたため、今後も継続して調査してゆきたい。